

ふるさとを語る

兵庫県は、日本の縮図と言われるほど多様な魅力をもつ県で、多彩な人材を輩出しています。そこで、毎回、さまざまな分野で活躍中の方に「ふるさとひょうご」を語っていただいています。今回は、朝来市（旧山東町）出身の落語家の笑福亭鶴笑さんに、入江県人会事務局長（兵庫県東京事務所長）がお話を伺いました。

笑福亭 鶴笑さん



朝来市（旧山東町）出身。落語家。1984年六代目笑福亭松鶴に入門。1993年ABCお笑い新人グランプリ優秀新人賞受賞。1998年ハンガリー国際形劇フェスティバル特別賞受賞。2000年海外に活動拠点を移し、シンガポール（4年間）、ロンドン（4年間）で合計8年間の海外生活を経験。2003年第53回芸術選奨新人賞受賞、イギリス・エジンバラフリンジフェスティバル制覇。文化庁より日本第一号の文化交流使に任命され、2004年に渡英。慰問活動を目的とした特定非営利活動法人「国境なき芸能団」を設立し、励ましの笑顔を届ける活動を通して、国際交流や国際貢献にも取り組む。2008年繁昌亭大賞創作賞受賞。2012年故郷・朝来市の観光大使に任命される。2016年「バベット落語」が厚生労働省の「児童福祉文化財」に選ばれる。

事務局長…朝来市（旧山東町）のご出身と伺っていますが、最初に幼い頃のふるさとでの思い出についてお聞かせください。
鶴笑さん…先祖代々山東町で、僕は高校生ぐらいまで過ごしていました。小さい頃は山へ登って基地を作ったり、川で泳いだり自然と遊んでました。家の裏山に登って、遠くの町や自分の住んでいる村を見渡して楽しんだり、商売をしていたおじいちゃんの運転するミゼットの隣に乗って一緒に配達に行くと、但馬中の街並を見て廻ったりしていました。当時はふれあいがいっぱいあったような気がします。近所のおっちゃんが悪いことをしたら叱ってくれたり、先輩がビー玉とか陣取りゲームとか自然の中でみんなやる遊びを教えてくれたりしました。高校は八鹿高校で、進学高校やったんですが、勉強が苦手やったのでまるで勉強しなかった覚えがあります。その頃、世界史の先生が面白いこと言うたら点数をくれます。30点以下が欠点というテストの、世界の三大天才を書けという問題で、「欠点取るのダ・ビンチ、ちゃんと教科書ミトランジェロ、ほんまにお前はアホヤロ」ってダ・ビンチとミケランジェロとラファ

エロにかけて書いたら、すごい丸を書いて30点くれました。それからいつもギャグばかり書いてね。そういう先生がいたから笑いの素養が培われたのかもしれないね。
事務局長…朝来市の観光大使をされていますが、朝来市の魅力、売りは何ですか。
鶴笑さん…朝来市は、手付かずの自然のまま観光地化されていないところがいいと思うんです。2016年には住みたい田舎ベストランキング1位に選ばれてますが、住んでいる人は、良さに気づかないんです。竹田城跡にしても「こんな石垣だけで、大阪城や姫路城みたいな城があったらいいのに」ってみんなが思っていたのに、一枚の写真から火が付いて、人がどんどん押し寄せて来るようになってきて。普通の観光地は一度見たらだいたい同じですが、竹田城は、時季によって顔が違います。雲海も見られたり見られなくなったり。その雲海を見たさに何回も来てくれるんですよ。他にも生野銀山みたいな有名なところもあります。朝来市は、みんなが忘れてしまったような昭和の匂い、ふるさとの味が残っているとこやと思うんでそのへんの町

や村を歩いてもらっても面白いと思いますよ。美味しい食べ物もたくさんあって、岩津ネギはほんまに美味しいです。但馬牛の里というだけあって牛肉もレベルが高いですし、お米もすごく美味しい。なかでも僕が一番美味しいと思うのはうちの親父が作ってるトマトとキュウリです。太陽の光、澄んだ空気きれいな水。畑から熟したものを採ってきて「食べえ」って言うから、こんなうまいものはないなあって。都会のスーパーやデパートではこんな熟した野菜は置けないと思うんです。ぜひ、朝来市に来てもらって、みんなが心を込めて作った野菜を味わってほしいですね。
事務局長…落語の世界に入ろうと思ったきっかけを教えてください。
鶴笑さん…小さい頃からお笑いが好きで、テレビで漫才とか落語を見て、憧れみたいなものはあったんですが、恥ずかしがり屋で、前へ出てわーってやるタイプじゃなかったんで、まさか自分が成れるとは思ってなかったんです。高校を卒業して都会へ出てから自由になつてそのまま居座ってしまったって、24歳にな

るまで、大阪や東京で定職に就かず今というフリーターみたいなことをしてました。そんな時、映画「フーテンの寅さん」にうちの師匠（六代目笑福亭松鶴）が出ていたのを観て、じーんときて「そうや僕は小さい頃お笑いになりたいたって言うてたな、この人すごい好きやったな、この松鶴さんにもっぺん怒ってもらおう、もっぺんやり直そう」と。落語家になりたいたいというよりも「松鶴」という人物に惚れて、憧れて、会いたいという一途な思いで入ろうと思ったんです。
— 師匠のところに行くまでがどきどきで、気が弱くて一週間くらい家の前でうろろろしてました。誰も背中を押してくれへんし、自分で行くしかないやと思って「おはようございます！」って扉をどんと叩いたのを覚えてます。師匠に、「帰れー！往にさらせー！もういらんのじゃー！」って大声で言われて、しゅーんとなって帰りました。でも、今までの思いがありますから、「こんなんで諦めたらこれから生きていかれへん、但馬の粘りで頑張ってみよう」と1週間から10日ぐらいつつた頃に師匠の奥さんに「ちょっと話を聞いたり」と言っていたら、やっとな家に入れたんです。師匠から、「あかんあかん、もう弟子はよけおんねや、鶴瓶紹介しよか？仁鶴のどこ行くか？」と言われました。試されていたんでしようけど、僕は正直に「松鶴師匠に憧れて来てるんで、他の一門に入る気はないんです、落語家なんて僕は無理やと思うんで、ちよつとつかせていただきたいんです」って言ったたら、「わかった、そんなにやりたいいやつたら考える、親を連れて来い」ってなつたんです。親父に「落語家で一生やって行きたいんや、親が許してくれたら入門を許すって言うてくれる、頼む！」ってお願いしたんです。反対されるかと思つたんですけど、「自分で見つけた仕事はおとうさんは反対せえへん、一緒に行つたるわ」って言うてくれて、スーツを着てお酒を持って「宜しくお願います」って頭を下げてくれたのを今でも覚えてます。

事務局長・修行時代のエピソードをお聞かせください。

鶴笑さん.. 師匠は、めちゃくちゃ厳しかったんです。毎朝水を撒くんですが、雨が降ってたから休んでたら師匠から「何休んでんねん。水撒かんかい！」と言われたんで、僕が「師匠、雨降ってますねん」と言うと「傘差して撒かんかい！」と怒られて、傘差して撒いたんで。なんでこないなことをせなあかんのやろと。でも、師匠からこれをせいとされたことは雨が降ろうが雨が降ろうがやらなあかん。修行というのは、まず厳しいこと、理不尽なことを言うんですけど、やっぱり意味があるんですよ。今思うと、僕ら落語家はどんなにしんどくても、親が死んでもちゃんと行って落語をやらなあかんということを教えてくれたんやなと思います。うちの師匠はよく怒ってくれました。礼儀、作法。でもね、うまいこと返すと笑ってくれるときもあるんです。「10分で行ってこい！」って言われて、遅れた時でも「道が混んでまして」とか言い訳したら怒られるんですが、「向かい風がきつくて遅くなりました」と言ったら、「そらしゃーないな」と笑ってくれました。「あー、こういう洒落の世界なんや」と思いましたね。

事務局長.. 厚生労働省から児童福祉文化財に認定された「パベツト落語」はどういうきっかけで編み出されたのですか。

鶴笑さん.. 最初は古典落語をやっていたんですが、入門から2年半頃に師匠が亡くなったとき、一人でぼーんと放り出されて、仕事が全くなくなりました。師匠から生前、「お前は鶴笑流の落語をやったらええ、落語家をやっていることはみんな落語なんや、それが笑福亭や」と言われてたんで、いろんな新作落語を作ったり、自分を出せるような表現をしようと思ったんです。当時は、心齋橋二丁目劇場ができ、ダウンタウンを筆頭にNSC（吉本総合芸能学院）出身の「ノンブランド」といわれる師匠を持たない芸人が出てきて、大ブームになりました。漫才も今までのしゃべくりではなく賑やかでコント的、服装もジー

パンとかTシャツの普段着で出るようになってたんです。そういう時に僕は着物で二丁目劇場に出たんですが、時代に合わなかったんでしょうね、みんな落語を聴かずに、トイレへ行ったり休憩して、毎日「シーン」。

あるとき客席を見たら、子どもたちが手作りのフェルト人形を付けてるのが見えて、「よし！人形でやろう、この子たちの好きなもんでやろう」とって人形を持って行って落語をやったら、今まで本を読んだ子が、見てニコッと笑ってるんです。そこからが始まりですね。でも、こういう落語は初めてですから、劇場では受けますが、落語協会から、「なんや人形なんか使って」と怒られて、呼ばれなくなりました。でも僕はお客さんが喜んでるなら間違いやないと思ったから一生懸命やっていたんです。継続は力、レベルアップして人形のクオリティも高まってきて、だんだん周りからも認められてくるようになりました。最初、色物扱いされていたパベツト落語が、上方落語の殿堂「繁昌亭」で、一枚看板でトリを任せられるようになった。これは前代未聞で、自分の置かれた立場がほんま夢みたいで、いまだに信じられないんです。

事務局長.. 活動拠点を海外に移されたことがありますか、何かきっかけがあったのでしょうか。

鶴笑さん.. ラジオやテレビでレギュラーをもらえたりして、パベツト落語が確立し始めたんです。それで、これは世界中の人に笑ってもらえるんじゃないかと思ひだしました。おじいちゃんも昔上海で商売をしてた、但馬出身で冒険家の植村直己さんも活躍した。僕も世界に通じることをしてみようって具合でハードルは別に高くなかったんです。最初、ニューヨークに行ったんですが、それまでアメリカはすごいなあとか憧れやっていたのが、僕の落語を聴いてみんなが、「ブラボー！ブラボー！」って言うてくれて。笑いはみんなの心が開かれる、笑いは世界の共通語、壁を無くしてくれるもんやというのが分かって、そこからイギリスやらオーストラリアに毎年い

ろんなところに行くようになってたんです。

これがきっかけになって、世界中を笑わそうと思つたらいつか世界に住んでみなあかんと、今度は海外に住みたくなつたんです。僕は当時40歳の手前で、40歳、50歳でどんな人間になつてるか夢が描けなくてこのままでは成長がないなと思つたのもあって、家族と一緒になんのあてもなしにスイツケース一つでシンガポールに行ったんです。

シンガポールでは、毎日いろいろ勉強をして慣れてきたらテレビやラジオのレギュラーとかどんどん仕事が増えていって、4年間でブル付きの家が借りられるようになるまでになりました。そんな時に文化庁から僕に、文化交流使第1号として日本の文化の普及に世界へ行ってみませんかとお話がありまして、文化交流使としてロンドンへ行つたんです。

ロンドンでは、保証人も仕事もない状態でアパート探しから始め苦労しましたが、家族に勇気づけられて、帽子持ってゴザ敷いてストリートから始めたんです。

ストリートでも徐々に勝手がわかってきて稼げるようになり、他の芸人も仲良くなつてコメディクラブを紹介してもらいました。コメディクラブのオーブンマイクという新人発掘コーナーに合格して初めていろいろ広がっていきんですが、3人のお客さんがレツドカードを持って面白くなかったら挙げる。5分経ったら合格で、3つ挙がった時点で不合格。僕もいろんなことをして何回も挑戦したんですがいつも不合格。悔しくて、侍の格好をしてサングラスをし、舞台上上がる前にレツドカードを持つているお客さんを大阪のノリでずばーと切つたんです。そして、コメディの国やから、大阪と一緒に死んだふりをしてくれたんです。それで、「もう死んでるから大丈夫だ」と堂々と舞台上がって5分間やったら大爆笑でスタンディングオベーション。そこからロンドンでも仕事ぐるよになりまして。イギリス教育省の依頼で、ワークシoppで子どもたちに日本の文化なども教えました。これ以上僕は学ぶこともな

いなと思つていたところに、繁昌亭から、「寄席には、鶴笑みたいな賑やかな芸人が必要やから戻つて来てくれへんか」とお誘いがあって、僕が役に立てることができると思つて戻つてきたんです。

事務局長.. 最後に東京兵庫県人会の会員の皆さんへメッセージをお願いします。

鶴笑さん.. ふるさとって良いですよ。ふるさとから外にでると、ふるさとへの思いはもっと強くなります。去年の9月に東京で落語会をしたら（東京・鶴笑ファンの会主催）、県人会からもたくさん来ていただきました。企画してくださった太田さん（東京あさひ会事務局長）からも、但馬の皆さんが揃つて来てくれたと喜んでいただけました。「ふるさとの人間が頑張るとるんや、みんな応援したろやないかい」という皆さんの思いになんか僕ジンときてしまつて。東京でふるさとのみんなが集まるって嬉しいですね。気楽に集まって喜びを分かち合つたり、慰め合つたり、今後の糧にするとか、県人会というのは大事なもんやなと思います。この思いを東京に来てる若い子たちにもわかってほしいですね。これからも日本全国で、兵庫県民、ふるさとの人間集まれーってやっていきたいですね。みんなすぐに仲良くなれますよ。同じふるさとに同じ時代に生まれたというのは奇跡なんやから。

